

ンブリッジ論争)

本稿では、資本ストックを用いず、そのかわり自然 (= 資源) という概念を用いる。

つまり

$$Y = F(L, M, t)$$

M : 自然

仮定より自然は一定であるので

$$Y = F(L, t)$$

となる。

こゝで時間 t を固定した時の $Y = F(L)$ を考える。

$M=1$ の場合

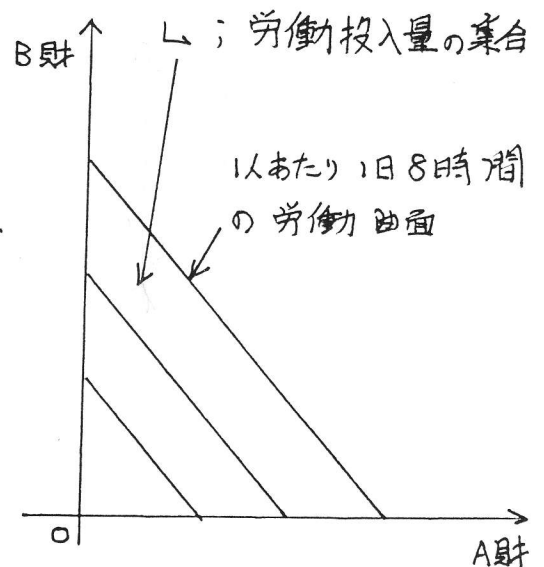
まず、労働投入量の集合 L を考える。労働投入量を、

平均化された労働の労働時

間としてわかる。その時、

労働投入量の集合は \mathbb{R}_+^1 内の点の集合とみなされ、右図

のように表わされる。この時、1人あたり1日の労働時間は、0時間から24時間までの値をとるが、肉体の再生産のため24時間労働と



いうのは無理である。つまり、最高は内体の
 再生産が可能な労働時間と存る。今日では、
 労働運動の中で一つのルール、例えば8時間
 労働等が形成された。(これは自由放任主義
 とは、若干質の異なるものである。)ここ
 では、8時間労働を最大労働時間としておき、
 一定期間に可能な労働投入量の集合しの中に、
 平均化された労働の総労働時間が一定な点を
 結んでできる曲面を考えると、総労働時間の
 大小により、「擬順序」が定義される。

つまり X_1 財, X_2 財, ..., X_n 財それぞれに投入
 された労働時間を l_1, l_2, \dots, l_n とすると、

$$l_1 + l_2 + \dots + l_n = l$$

となる (l_1, l_2, \dots, l_n) の集合が作る曲面を考
 え、その合計(つまり l) の大小により「擬
 順序」を定義する。

次に t_0 時の $F: L \rightarrow Y$ を考える。集合 L は、
 一定期間に生み出される、 X_1 財, X_2 財, ..., X_n
 財の生産量の集合である。 F は次の性質を満
 たすものとする。

I. 集合 L と Y は n 次元 コンパクト 多様体
 を 集合 Y と Y convex な n 次元 コンパクト
 多様体 に 写す 同相写像 である。

II. F は 集合 L の 「擬順序」 を 同型 に 集合
 Y の 中に 生み出し、その 「擬順序」 は、

$(0, 1) \ni t$ 及び、異なる 2 点 $x, y \in Y$
 に対し、

$$x \sim y$$

$$\Rightarrow (1-t)x + ty < y$$

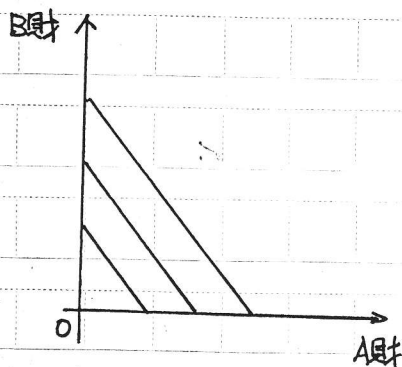
が 成立する。

つまり、集合 L の 中の 平均化された 労働
 の 総労働時間 が 一定な 点を 結んで でき
 る 曲面を、同相写像 F により 集合 Y の 中
 に 写した 曲面が、concave であることを仮
 定する。

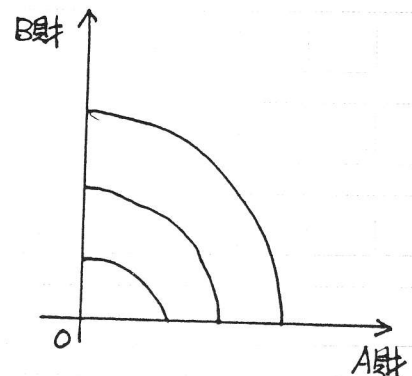
II は、自然の 稀少性 より 導かれた もの
 である。スケール メリット は 無視して い
 る。

III. $F(0) = 0$

$u = s$ の場合



労働投入集合 L



生産集合 Y

5. 生産空間と消費空間の関係

ここで、労働の質に関連して、シュンパーターの「新結合の遂行」を考えてみよう。

シュンパーターは、新結合の遂行という概念に五つの場合を含ませている。

(1) 新しい財貨、すなわち消費者の間でまだ知られていない財貨あるいは新しい品質の財貨の生産

(2) 新しい生産方法、すなわち当該産業部門において實際上未知な生産方法の導入

(3) 新しい販路の開拓

(4) 原料あるいは半製品の新しい供給源の獲得

(5) 新しい組織の実現

これを実行する人間を、シムンパーターは「企業家」と呼んだが、本稿のモデルではこれを労働の質の問題として取り入れる。

つまり、労働を次の三つに分類する。

(1) 単純再生産労働（第一の労働）

(2) 生産性の向上により、生産集合 Y を拡大させる労働（第二の労働）

(3) 今までにない効用を与える新たな財を生み出すことにより、消費可能集合を m 次元コンパクト多様体から $m+1$ 次元コンパクト多様体に変化させる労働（第三の労働）

本稿で特に強調したいのは、第三の労働である。この労働が、本稿の経済発展の鍵である多元的生産様式の深化を行う。

さて、自由放任主義的交換経済は、自我の完全な解放であると定義することが出来る。自我の完全な解放を、自由で定義するならば、まさしく自由主義社会である。

しかし、自我の解放は、交換を媒介として、自我の対立となる。競争社会である。自己生産自己消費^{経済}の場合（近代経済学がよく例に出されるコビンソン＝フルーソーの場合）においては、労働時間をも含めて最大効用をもたらすように生産・消費行動を行なう。しかし自由放任主義的交換経済の場合、生産者及び消費者それぞれの立場の中で自我の対立が生じるばかりでなく、生産者と消費者という関係においても自我の対立が生じる。生産者として、他の生産者との利潤獲得競争において、平均化された労働時間が他人よりも少ないこととは、他の生産者に比べて自らの利潤が少ないことを意味し、結局労働時間が最大労働時間に存らざるを得ない。また、消費者として、生産者が失業しようがすまいが、自らの一定期間の効用（生産者の労働時間と考慮し含む）を最大化する行動を行なう。まして、効用物を中心において生産者と消費者が、その構成員が同じ人間であるという

事実にもかかわらず、分裂し相対しているの
 である。

このようにして、自由放任主義的交換経済
 の場合、労働時間⁵は労働投入量の集合 \mathcal{L} のバ
 ウンダリー上、つまり最大労働時間の曲面に
 定まる。そして、それは関数 F により、生産
 集合 \mathcal{Y} のバウンダリー¹⁰—である $n-1$ 次元コンパ
 クト多様体 $(\partial\mathcal{Y})$ 上に写され、ここで生産が
 常に決定される。それに対し、消費行動は消
 費可能集合 S の任意の点で決定される。つま
 り、生産は $n-1$ 次元コンパクト多様体上で決
 定されるのに対し、消費は n 次元コンパクト
 多様体上で決定される。この次元の差が、自
 己生産自己消費の場合、つまり生産も消費も
¹⁵ n 次元コンパクト多様体の任意の点で決定さ
 れる場合との、決定的な違いを与える。

自己生産自己消費社会の場合、第二の労働
 (つまり生産集合 \mathcal{Y} を拡大させる労働)が行
 われ、生産集合 \mathcal{Y} が、消費可能集合 S の最大
 効用点 s_0 を内点に含むようになった時⁵でも、¹⁰

著者 泉 宏明

住所 〒739-0145 広島県東広島市八本松町宗吉 92-5

HomePage

http://www7a.biglobe.ne.jp/~popuri_art/izumi/

copyright©2012 泉宏明 all rights reserved.